

推理 4——タイタンの遺産

^{せんり}千里は一人きりでの捜査を終え、考えを整理していた。

千里 「犯人はオーナーのときと同じように、死体の上に巨岩を落とそうとした」

実際には^{とうごう}東郷は死んではいなかった訳だが、^{イメージ}思念の中で犯人は東郷が死んでいると勘違いしていた。

千里 「ウインチに引っ張られて、巨岩が崖下に落ちる。でもそれよりも先に、巨岩の重さで崖が^{じくず}地崩れを起こして、落下地点が少しずれた」

結果、巨岩は東郷にはぶつからず、岩場の地面に激突して砕けた。つまり東郷は、地崩れという偶然によって九死に一生を得た訳だ。

しかし結果はどうあれ、犯人が東郷の体を巨岩で押し潰^{つぶ}そうとしていたことは間違いない。

破壊しようと意図をもって実行した時点で、つまりウインチで巨岩を引っ張った時点で、サイコメトリーの発動条件は満たしている。

千里はクルーザーに乗り込み、ウインチのすぐ近くに立つ。

しかし——脳裏には何の^{イメージ}思念も流れ込んでこない。

どういう訳か、千里のサイコメトリーは発動しなかったのだ。

▼最終推理

最終推理：タイタンの遺産

犯人は【持田／三根／西園寺／柳】だ。

【持田／三根／西園寺／柳】には【 】にアリバイがあり、
【 】の間にオーナーの死体を運ぶことができない。

【持田／三根／西園寺／柳】は【 】なので、ウインチを
動かして巨岩を崖から落とすことができない。

そもそも、第一の事件における犯人の真の目的は、タイタンの
遺産を【 】ことだった。しかし、この計画には根本
的な欠陥がある。^{けっかん}【持田／三根／西園寺／柳】ならばその欠陥
に気づき、タイタンの遺産を守るためにオーナーを【 】
とするこの計画の実行を^{とど}留まったはずだ。

※※※※※※正しく推理するまでこの先には進まない※※※※※※

エンディング

犯人はわかった。でも、大変なのはこれからだ。

どうやって犯人を^{かんねん}観念させるか。そしてどうやってクルーザーのエンジンを掛けさせるか。

千里が犯人と^{たいじ}対峙するとき、いつだってすぐ側には東郷がいた。しかし今回ばかりは、千里一人でやり遂げなければならない。

既に計画は立ててある。仕込みも済んだ。
あと必要なのは——覚悟だけだ。

^{ほお}頬を叩いて、自室から出る。リビングには全員が集まっていた。
30分ほど前に、話があるから集まるよう声を掛けておいたのだ。

千里 「お集まりいただきありがとうございます。時間がないので、
単刀直入に。犯人がわかりました」

持田 「ほ、ほんまかいな？」

千里 「はい。順を追って説明しましょう。オーナーは巨岩の下敷
きとなっていました。後頭部には^{じゅうそう}銃創がありました。生活
反応から見て、死因は銃殺に間違いありません」

千里 「また、オーナーの口の中には葉巻の切れ端が残っていました。
このことから、オーナーはちょうど葉巻を吸おうとして
いたときに殺されたと考えられます。^{みね}三根さん、オーナーは
葉巻についてなんと言っていましたか？」

三根 「そうね。いつも決まった場所で吸うことにしている、と言っ
ていたわ」

千里 「ありがとうございます。このコテージには、オーナーが砂浜の流木に腰掛けて葉巻を吸う写真がありました。つまり、本当の殺害現場はこの流木付近だったんです」

持田 「待ってくれへんか。そんなら、その後どうやって死体を移動するっちゅうねん。オーナーはあの通りの巨漢きょかんやで」

千里 「その方法の手掛かりは、もう1枚の写真に写っていました。この夜釣りの写真をよく見ると、砂浜がまるごと海に沈んでいることがわかります。つまり、犯人はオーナーを海に浮かべて運んだのです」

千里 「昨晚確かめたところ、砂浜が沈むのは満潮時の23時30分から23時40分の10分間だけ。この時間帯、柳やなぎさんにはアリバイがあります。よって、柳さんは犯人ではありません」

柳 「よ、良かった……。確かに23時から24時までの間、僕は東郷さんと話していましたよ」

持田 「ちょい待ち。他の可能性は考えられへんか？ あのクルーザーのウインチで死体を引っ張ったんや。機械の力ならオーナーだって運べるやろ」

千里 「残念ながら、それはあり得ません。ウインチで引っ張れば、当然オーナーは地面を引きずられたことになります。しかしオーナーの手足には傷一つなく、引きずられたような痕跡はありませんでした」

千里 「話を続けましょう。犯人は満潮時にオーナーを巨岩の真下に移動させた後、巨岩を崖から落しました。このときに使われたのが、先ほども話題に出たウインチです。しかし、このウインチを使うことができない人物がいました。柳さん、西園寺さいおんじさんの話を改めてしていただけますか」

柳 「あ、はい。西園寺さんは昔から極度の閉所恐怖症なんです」

千里 「ありがとうございます。ウインチはエンジン式で、クレーザーを稼働させないと使用できません。そしてご存じの通り、クレーザーを稼働させるには、あの狭い整備室に入る必要がありました。閉所恐怖症の西園寺さんには整備室に入ることができないので、西園寺さんは犯人ではありません」

持田 「いやいや、そうとは限らへんやろ。昔はどうやったか知らんが、今はもう治ってるってことも……」

千里 「残念ですが、その可能性も極めて低いでしょう。皆で順番にシャワーを浴びたとき、西園寺さんの後のお風呂の床は濡れていませんでした。このお風呂は狭くて、閉所恐怖症の西園寺さんには入ることができなかったのです」

千里の言葉に、西園寺は^{かす}微かに顔を赤くする。

西園寺 「あの……ちゃんと濡れタオルで体は拭いておりますよ」

その場違いなほどの気の抜けた反応が、何より彼女が犯人ではないことを裏付けていた。

三根 「残ったのは、^{もちだ}持田さんと私って訳ね。先に言っておくけど、私が犯人だなんて言うつもりなら張り倒すわよ。こう見えても空手黒帯なの」

千里 「申し訳ありませんが、探偵は暴力には屈しません。話を本題に戻しましょう。お二人のどちらが犯人かを見極めるためには、何故犯人が巨岩を落としたのか、という問題に立ち戻る必要がありました」

持田 「なんでって、そりゃあ巨人の犯行に見せかけてビビらせようとしたんちゃうんか？」

千里 「確かに一見そう思えます。ですがこの犯人の真に恐るべき点は、まさにその、我々の思考を自然に誘導するテクニックにあるのです。下書きに残された『大^だ太^{いだ}法師^{ほうし}』という署名もそうですし、この『周^す防^{おう}泰^{たい}山^{ざん}が隠した大判小判』という一文もそうです」

持田 「そ、それはどういう……」

千里 「そもそも、いつの間に我々はタイタンの遺産を大判小判だと思い込んでいたのでしょうか。確かに根強い噂ではありますが、特に根拠がある話ではありません。それをいつの間にか前提にしてしまっていたのは、このメールの下書きにそう書かれていたからに過ぎません。つまり、犯人はずっと我々を^{ミスリード}誤誘導していたのです」

持田 「そ、そんなこと……」

千里 「その最たるものが、下書きにある『石の矢印を^{たど}辿れ。その先にお前達に相応しい対価がある。不届き者共に相応しい対価は、死だ』という文章です。この文章のせいで、我々は石の矢印を辿った先にオーナーの死体があることに……いえ、死体しかないことに自然と納得してしまった」

千里 「ですが、果たしてこんな演出のためだけに、犯人が無数にある巨岩に矢印を残していくのでしょうか？ 元から矢印は巨岩に刻まれていた、と考えた方がずっと自然です。ならばその先にあるのは、死体ではなくタイタンの遺産であるべきです」

持田 「さ、さっきからあんた……何が言いたいんや」

千里 「はっきり言いましょうか。タイタンの遺産とは、オーナーを押し潰していたあの巨岩そのものです。犯人はタイタンの遺産が崖の上にあると都合が悪かった。おそらく、あの巨岩だけは紫外線を受けると、石全体が光るんじゃないでしょうか？」

千里 「犯人はそれに気付かれたいくなかった。だから日陰^{ひかげ}となる崖の下に落とした。崖は西向きで、東から昇る太陽の光を遮ってくれます」

夜明け前。柳の体が日差しを遮ったとき、矢印は光らなくなった。それと同じ理屈だ。そして日が昇り、巨岩に直接日が差すところには、辺りは既に明るくなっていて微かな発光には気付きようがない。

千里 「そう考えたとき、第二の事件の意味がわかりました。犯人は採掘ライト——鉱石鑑定用の特殊なライトを巨岩に当てられたから、口封じをしなければならなかったんです」

第二の事件現場に残った思念^{イメージ}で、犯人が動揺している訳だ。確かにそれは、真の狙いを刑事に暴かれたと勘違いしても仕方がない。事件の後、犯人がライトを隠したのも当然だった。

千里 「つまりあの巨岩は、ただの石ではなく特殊な鉱石だったのです。この島は元々採掘場だった訳ですから、タイタンの遺産が鉱石だったとしても不思議ではありません」

千里 「話を本筋に戻しましょう。犯人は巨岩——タイタンの遺産を崖下に落とさなければなりませんでした。しかしその衝撃でタイタンの遺産が砕けたら何の意味もありません。だから犯人は、オーナーをクッションにしたのです」

千里 「オーナーは元力士で肥満体型。体重も200キロはあるでしょう。なるほど、確かにそういう目で見ればクッションとしては最適です……あまりに非人間的なモノの見方ではありますが」

犯人は人間の死体を、ただのクッションとして見ていた。

だから第二の事件で巨岩を落としたとき（第一の事件で巨岩を落としたことを不自然に思われたいよう、第二の事件でも巨岩を落とすことにしたのだろう）、千里のサイコメトリーは発動しなかった。犯人は死体をその程度にしか認識していなかったのだから当然だ。

では第一の事件はどうか？ 第一の事件でサイコメトリーが発動したのは、死体の損壊ではなく、誤ってタイタンの遺産を壊してしまうかもという犯人の恐怖のためだった。

サイコメトリーは、壊してしまうかもという恐怖にも反応する。

かつて東郷が千里を守ろうと射撃を行ったとき。誤って千里を撃ち殺してしまうかもしれない、という東郷の恐怖心にサイコメトリーが反応したことがあった。構図としてはそれと同じだ。

それにサイコメトリーは、人でなくとも、本人が重要と考えている物品であれば発動する。

改めて振り返ってみれば、巨岩を落とすときの^{イメージ}思念で、犯人が『もしこの計画が失敗し、バラバラに^{くだ}砕けたならば』と考えていたのは^{ひ ゆ}比喻でも何でもなかった訳だ。

持田 「ま、待たんかい。確かに犯人の動機はわかった。でも結局、肝心なことはわかつとらんのやな。誰が犯人かは……」

千里 「そう思いますか、持田さん」

持田 「そ、そうや。だって今の話を聞いても、犯人を特定する情報はなかった。違うか？」

千里 「そうですね。持田さん、あなたはそう思われるでしょう。では、三根さんはどうでしょうか？ 何か気付かれたことがあるのでは？」

三根 「…… 1 つだけあるわ。タイタンの遺産でオーナーを押し潰したら、当然あの巨岩も現場検証で警察に調べられる訳よね」

千里 「そうなりますね」

持田 「そ、その何が問題やねん。見た目はただの石や。特殊なライトを使わん限り、あれが特別な鉱石やとはわからん」

千里 「そうなんですか、三根さん」

三根 「いいえ。最近の捜査では使うのよ、その特殊なライトをね。
ブラック
紫外線ライトっていう紫外線を出すライトを現場検証で使うって、東郷さんから聞いたわ」

第二の事件で、東郷が採掘ライトで巨岩を照らしていたのも、それが理由だったのだろう。東郷は紫外線が出る採掘ライトを、現場検証のための^{ブラック}紫外線ライト代わりに使おうとしていたのだ。

千里 「三根さんがその話を聞いたのは、我々が一度解散した 2 1 時直後。2 1 時にはまだオーナーは生きていました。となれば、三根さんはこの話を聞いた後にオーナーを殺したことになりますが……もう、おわかりですよ。三根さんにはそんなことをする意味がないのです。だって、元から計画が^{はたん}破綻しているんですから」

千里 「タイタンの遺産を隠すためにオーナーをクッションにしても、結局は警察の現場検証でタイタンの遺産は見つかってしまう。よって、三根さんにはこの計画を実行する動機がない」

持田 「ま、まだや。犯人は数日……そう、次の船が来るまでタイタンの遺産を隠せれば良かったんとちゃうか。その^{すき}隙に、どうにかあの巨岩を回収する方法を持ってたんや」

千里 「あり得ません。だって犯人は事件を起こした時点で、クルーザーを稼働できる人間がいないことを知りようがなかった」

千里 「もし誰か一人でも機械に詳しければ、我々はすぐにこの島を出て、警察に通報できていました。巨岩を回収する余裕なんてありません」

持田 「う、うぐぐ……」

千里 「この島で起きた一連の事件の犯人、^{だいだらほうし}大太法師は——あなたです！ 持田さん！」

千里は持田に一步近づく。

千里の推理は決して完璧なものではない。

元々はサイコメトリーで見た^{イメージ}思念を元に構築した推理なのだ。サイコメトリーのことを隠して説明すると、どうしても^{あらけず}粗削りになる。

しかし今重要なのは、推理の正しさではない。

犯人である持田が^{かんねん}観念するか否かだ。

持田 「う、う……うる、うるうる……^{うるさ}五月蠅いっちゅうんじゃ！」

持田は素早く千里を抱き寄せ、他の3人から距離をとる。片手は千里を掴み、もう片手には拳銃が握られていた。

持田 「近付くなよ！ 特にその空手黒帯女。近付いたら、このガキの頭を吹き飛ばすからな！」

名指しされた三根は、隙があれば飛び掛かるぞ、という構えを取っている。

持田 「よお聞け。別に、わいも殺し合いがしたい訳やない」

持田 「わいの目的は1つ。タイタンの遺産を回収して、島を安全に出ることや。それを邪魔せえへんなら、誰にも危害は加えん」

千里 「……諦めてください。ただ逃げるだけならともかく、あの巨岩を回収するなんて不可能です」

持田 「持田家を舐めるなよ。一族全員トレジャーハンター。電波さえ通じれば、電話一本ですぐにでかい船を用意できるわ。だから、あんたらはそれを指を咥^{くわ}えて見てればいいねん」

持田はコテージの出口に近付きながら言う。

持田 「ええか？ このガキは人質や。誰もわいを追ってくるな。追ってきたらこいつを殺すからな」

柳と西園寺はこくこくと頷く。少し遅れて、三根も頷いた。

持田はコテージを飛び出し、千里に前を歩かせ、クルーザーを指す。銃口は千里の背から離さない。

千里 「……どうして、ここまでタイタンの遺産に執^{しゅうちやく}着するんですか」

持田 「どうせ言ってもわからへん。そもそも、あれは親父の代から持田家の獲物やったんや」

千里 「先代からの……？」

持田 「そや。30年前、タイタンの遺産が世間的に有名になる前から、持田家はその情報を掴んでた。なんでも『泰端島で採れた最も価値のある鉱石』やってな」

千里 「じゃあ、タイタンの遺産が大判小判だって噂は……」

持田 「親父が流したデマや。偽の噂を流すことで、他の奴らがタイタンの遺産を見つけられへんようにしたんや」

持田 「まあ、その親父も洞窟の中ばかり探してて、一向に遺産を見つけられずにだいぶ前に諦めよった。島中にごろごろある巨岩に混ざっとる、ってのは灯台下暗しやったんや」

持田 「今回新たに判明した『夜明けの直前、目を凝らせ』って話を聞いて、わいはすぐにピンときた。鉱石鑑定ライトに反応する種類の、紫外線で光る鉱石やってな。それも直射日光が当たる場所にある訳やから、島中にある巨岩に注目するのも簡単やった」

2 1時過ぎ。皆が部屋に戻った後、持田はこっそりとコテージを出て、持参した鉱石鑑定ライトで巨岩を調べて回った。普通の巨岩にも遺産の在処^{ありか}に至る矢印が刻まれていたため、タイタンの遺産はすぐに見つかった。

そしてタイタンの遺産を独り占めするため、オーナーを殺してクッションにする計画を立て、すぐに実行に移したのだ。

持田 「無駄話はここまでやな。ほら、早くクルーザーに乗れ」

千里 「……わかりました」

持田 「さて、問題はここからや。なあ、名探偵さん。わいはクルーザーを稼働させるため、整備室に入りたい。でもその間にあんたに逃げられたら困る。どうすべきやと思う？」

千里 「それは……」

考えるまでもなく、方法はある。最悪な方法だが。

持田は千里に拳銃を近付ける。千里の背を、冷たい汗が流れた。

持田 「悪く思わんといてくれ。こうするしかないんや」

銃声が響き、千里はよろめく。太ももから血が^{あふ}溢れ出していた。

持田 「これで逃げられへんな。あ、傷口しっかり抑えんと出血多量で死ぬで」

^{うめ}呻きながら太ももを抑える千里を尻目に、持田は素早く整備室に^{すべ}身を滑り込ませ、配線をいじる。掛かったのは10秒ほど。

整備室から顔を出すと千里の姿が消えていたが、これは想定の範囲内だった。逃げようとしてもあの傷だ。そう遠くへは行けない。

整備室から出ようとしたとき、妙な音がした。クルーザーのエンジン音だ。

誰が稼働させた？ ここにいるのは持田と千里だけ。自分ではないから、千里だ。しかし何のために？

そんな持田の疑問はすぐに解消された。整備室から出ようとする持田の上半身に、ロープが^{から}絡み付いてきて^{しば}縛り上げたのだ。

千里 「……クルーザーのエンジンが掛かれば、自動でウインチが動き出し、ロープの輪が縮まるように仕掛けておいたんです」

足を引きずりながら姿を現した千里は、スイッチを操作してウインチを停止させる。

^{がいじゅう}害獣を捕まえるくくり罠と同じ原理だ。目立たぬように整備室の出入口の周りにロープを^は這わせておき、ロープがウインチで引っ張られると、その中にいた人間を^{ほばく}捕縛する仕組みだった。

持田 「な、なんやと……。そんな準備する時間はなかったはずや。
い、いや……。まさかあんた、わいに脅されて従ってたのは……。
全部演技やったっていうんか？」

持田の脳内で今までの出来事が急速に組み上がっていく。

推理の大詰めで、どうして千里は不用心に一步近づいてきたのか。
人質に取られるためだ。

その少し前、どうして三根は急に自分が空手黒帯などと言い始めたのか。反撃の可能性を見せ、あの場にいた全員を殺すという強行策に出づらくするための牽制^{けんせい}だ。三根は千里と繋がっていたのだ。

そもそもミステリー小説でもあるまいに、どうして推理を始める前に「30分後にリビングで」などと全員を呼び付けたのか。

あれは、持田に拳銃を準備させるための時間だったのだ。

持田は呼び付けられた後、自分が犯人だとバレたのではないかと不安になり、念のために洞窟に拳銃を回収しに行った。バレたときに暴力で解決するために。そこまで含めて、千里の計画だった訳だ。

利発^{りはつ}さの中に、まだ微^{かす}かに幼さを残した探偵は言う。

千里 「言ったはずですよ。探偵は暴力には屈しないんです」

そして——すべての仕事を終えた探偵は、出血多量のために意識を失った。

エピローグ

千里が気絶した後。三根は事前の手筈通り、クルーザーを運転して神津島こうづしまに戻り、千里と東郷を病院に運んだ。

持田は警察に逮捕され、すぐに犯行を自供じきょうした。

その他には柳が西園寺に交際を申し込んだが、「今はそれどころではないので」とあえなく振られた。

柳が古物を西園寺の店に持ち込んでいたのも、彼女に会うための口実だったようで、古物は適当な骨董品店こっとうひんで購入したものだだった。

事件から一週間ほど、出血多量と心労しんろうが祟たたったのか、千里はずっと眠っていた。

千里が目覚めると、そこは病院のベッドの上だった。
そして——隣には千里の一番信頼する人物がいた。

東郷 「まったく、また無茶な計画を立てて」

東郷はかなり危険な状態だったが、手術のおかげでなんとか一命を取り留め、昨晚目覚めたのだという。

千里 「それはこっちの台詞です。本当に……心配したんですから」

タイタン島殺人事件—— *Fin.*